

M・フリードマン

「L・ワルラと彼の経済学体系」

Milton Friedman: L. Walras and His Economic System.

浜 崎 正 規

はしがき

ワルラの学者的生涯をふりかえってみるときわれわれの心を打つものは、一つの仕事に無条件に帰依するところのみられる偉大さであった。(T. A. Schumpeter: "Marie Esprit Leon Walras," *Zeitschrift für Volkswirtschaft, Sozialpolitik und Verwaltung*, 1910, Vol. XIX, pp. 397-402) そうして「純粋経済理論に関する限りでは、ワルラは経済学者のうち最もすぐれている。……ワルラの『純粋経済学要論』は科学としての経済学の発展において、急進的にしてしかも重要な一步に着目した偉大な労作である。なおそれは、経済学的思考 economic thinking において、重要な役割を演ずることは明かなことである。(T. A. Schumpeter: "History of Economic Analysis," 1954, p. 827)

M・フリードマン「L・ワルラと彼の経済学体系」(浜崎

ターほどL・ワルラに対して高い評価をなしてきた経済学者もすくなかろうと思われる。ところでそのような高い評価がでてくる理由は、実はシュムペーター自身の経済体系にあつたとみなければならぬ。すなわちシュムペーターの《純粋モデル》が、一般均衡の状態にある経済体系を基にして設定されたものであり、本質的には反復的な経済生活の循環的流れを基礎として構築されていることに帰因する。したがっていわゆるシュムペーター体系なるもの自体がワルラ流の経済学的接近法を基底としていたところにそのようなポジイティブな評価がなされねばならない理由があつたといえよう。それにしてもわれわれは、そのようなシュムペーターのワルラに対する積極的な評価を今日そのまま受け入れてよいで

あるうか。別の表現をもってすれば、シユムペーターのいうような《純粹モデル》をもってする経済分析の方法自体にはならぬ問題はないか。実はこういったオリジナルな問題がワルラ体系を問題とするに当っておのずから反省されてくる。

もとよりワルラ体系とシユムペーター体系の両者が、構造的に同一なものであるというようなことを反省の起点に包含していない。後者には、前者と理論体系上本質的に異った現実接近のための第二次接近の理論的パターンが導入されていることから、両者の差異を当然認めなければならない。しかしながら論理的には、シユムペーターの第一次接近である《純粹モデル》がワルラの提起したところの一般均衡の状態にある経済体系の設定から出発している限り、右のような根本的反省が両者をくるめてなされても不都合ではない。その場合いま一步われわれは、理論経済学一般に対する認識態度を明確にしておく必要がある。理論経済学が歩んできた理論的な諸語の姿態をまずもって考察するには、前分析的なそれぞれの問題意識にもとづく理解の仕方、考え方に遡って方法論的研究がなされねばならない。そうすることによってはじめ、科学としての経済学の理論的体系を構成する場合に、そ

れが一定の性格や特徴をもつものとして現れるのである。そうしてこのような点を問題としてとりあげる方法論的研究こそ、経済学のもつ学問的性格や特色を最も明白にして、その経済学に対する理解や批判をはじめて可能とするものであると考へなければならぬ。とすれば、いまの場合、ワルラにおける問題意識それにもとづく理解の仕方、考え方はいかなる理論的特徴をもっていたか、という点にかかわって、われわれなりに整理を試みておく必要がある。

ワルラの「純粹経済学要論」(“Éléments d'économie politique sociale,” 1874-77, Trans. by William Jaffe; “Element of Pure Economics or The Theory of Social Wealth,” 1934, 拙稿での引用およびフリードマン氏の論稿での引用はW・ジャフエ氏の譯訳書による。日本版訳書は手塚寿郎訳「純粹経済学要論」岩波文庫、上、下(以下書名を略して「要」)を彼の経済思想をしる上での重要な業績とすることには疑問はない。その場合、まずもって考へられなければならないことは、ワルラ自身が、科学の目的、内容等にかかわらず分類的部門との関係である。その副題がしめす「社会的富の理論」は、社会経済学の部門に属するものとされる『社会経済学研究—社会的富の分配の理論』(一八九六年)の前提となるものと考えなければならぬ。ワルラが後者において所有を論じ、租税による社会的富の分配を問題と

してとりあげたことは、社会理想としての社会的正義を問題意識として基底においてのことである。ところが前者すなわち『要論』におけるワルラは、純粋経済理論の擁立ということにとどまらず理論構成をなすには、所有権の問題も、社会的富の分配問題をめぐる社会的正義も理論認識の視界に入らないう事柄としなければならなかった。——第一編、第一章におけるワルラの経済学の定義に関する主張がしめすように——そのことは、いわゆるワルラ体系の純粋モデルを設定するための予備的作業であるとして一応承認するとしても、『要論』における彼の次の命題は、いかに理解すればよいか。すなわちワルラは、人間の最大満足の状態を仮定し、その最大満足を追及する枠すなわち自由競争下に市場の均衡が成立するという前提から自由競争は、社会の各人に最大満足をもたらす、といきぎっていることである。この点についてはすでに久武教授も指摘しておられるようであるが、『ワルラス』『純粋経済学』二二頁参照) 問題はワルラのその命題の価値規準と、ワルラの経済学を構成せしめる問題意識にある社会的正義の価値規準が同列におかれているということである。ここにわれわれはワルラ体系の矛盾をみいだすわけである。

M・フリードマン「L・ワルラと彼の経済学体系」(浜崎)

このようにわれわれはワルラの『要論』のうちに価値規準をめぐって敘述内容に矛盾をみいだすわけであるが、それも現実分析の仕方、そのためにつくられた理論的道具が一定の状況に対応したいわば限定されたそれぞれであるという認識が消え去ってしまうところに問題があるのではなからうか。一般的にいって理論経済学の発展過程をたぐってみると、ともすれば経済学者が道具化された知識の構成、その展開ということのみに関心をもち、現実分析の学としての経済学からかけ離れたものに終ってしまっているのも、暗に理論的道具自体に価値規準を附加せしめて問わないところに原因があるように思われる。

さて以上のような問題意識にたつて、シカゴ大学の経済学の教授M・フリードマン(Milton Friedman)の「L・ワルラと彼の経済学体系」(“Leon Walras and His Economic System, A Review Article,” *The American Economic Review*, Vol. XVI, No. 5 pp. 900~909 Decem. 1955)を紹介してみよう。この文献は、ワルラの『要論』を単に純粋理論という知識形態の系譜において位置づけようとするものではなく、ワルラの経済思想を方法的考察のもとに整理

し、彼の思想的限界をつきとめようと企図したものと考えられる。ところでワルラ体系は、フリードマン教授にとっては、シムペーターに映じたほどポジティブなものではなかつた。しかしもし教授がいうように、経済理論も分業の形式をとって進展するものであるならば、ワルラにはワルラなりの、マージナルにおいては、マージナルなりの功績をみいだすとしなければならぬであろう。けれどもそれぞれの功績を認めるにしても、その場合基準を何においてのことか。いかえると経済学の歴史的、現実的性格を一体どういった視角から理解せねばならないのかという基本的問題が提起してくるのである。フリードマン教授は、こういった点については詳細な検討をなそうとはしていない。もとより今のわれわれの課題は、教授自身の態度をとやかく問題とすることにあらぬのではない。

* * *

フリードマン教授は、『要論』において展開された基本的論題を二つに整理する。すなわち(一)稀少性 *rareté* あるいは限界効用 *marginal utility* の分析。(二)一般均衡の理論 *theory of general equilibrium* がそれである。この両者の関係に

ついて、教授は「ワルラはこれらの両者は相調和する総体においてともに適合しあうものと考えた。しかも前者の分析は、後者の研究にとって不可欠なものとして論議している。しかしながらワルラのその総体なる概念は、きわめて曖昧であるといわなければならない。そのことについてはいまふれないとして、ワルラにおける限界効用の分析は、経済学者としての彼の学問的領域を直接拡大するという点で重要であるというよりも、むしろ経済学的アイデアの発展を、端的に彼に理解しようという点で印象づけられるのである。」(Ibid., p. 900)という。以上の論行にうかがわれるのが、フリードマン教授のワルラ体系に対する概括的理解の骨子のようである。ではどのような検討を経てそのような理解に到達したのであろうか。そのためにまず教授は、ワルラの限界効用分析の思想的性格を尋ね、続いて一般均衡理論の内在的意味を明確にすることに努力をし、ついでワルラ体系の理論的限界を指摘する行論をたどるのである。

一 稀少性

さてワルラは、クルノーにしたがって簡単な商品の交換

の場合から稀少性を説明することに着手したことは周知のところである。フリードマン教授は『要論』における第二編「二商品相互間の交換の理論」の敘述をとりえて「ワルラは、効用分析をなす以前に需要曲線と供給曲線を導入し、それらの曲線の典型的な『型』を論議している。そうしてその論議を基礎にして、不安定均衡から安定を区別する二曲線の交叉する諸点の意味を考察したのであった。しかもこれらの問題は『交換の性質』“nature of exchange”をあらわすものとして記述され効用曲線はその場合交換の『原因』“cause”を検証するために導きだされるのである。」(Ibid, 901)という。このように教授にしたがえばワルラにおける効用分析の説明は、まさに交換現象の「原因」を検証づけするものとして、技術的要素の性格をもつものとして登上してくるのである。したがってそのことは、おのずからジェボンス、メンガー等に見られる効用分析の方法とは異つたものとして理解されなければならないし、また効用曲線のもつ理論の意味もこれまた二者と相異つた内容をもつものとしてとらえられなければならない。ところでワルラが根本的に強調した命題は何であったろうか。フリードマン教授は、ワルラ自身に語りしめて次の

M・フリードマン「L・ワルラと彼の経済学体系」(浜崎)

一節を引用する。すなわち「自由競争の行われる市場において、二商品の間に行われる交換は、二商品の何れか一方の総ての所有者なり又は雙方の総ての所有者なりが、共通にして同一の比率で売る所の商品を与え、買う所の商品を受ける条件の下において、各人の欲望の最大満足を得ることのできる行動である。」「社会的富の理論の主な目的は、この命題を一般化し、これがまた二商品間の交換と同様に、多数の商品間の交換にも相通するものであり、また交換におけることと同じく、生産の自由競争の場合にも、相通するものであることを明らかにするにある。社会的富の生産の理論の主な目的は、この命題から帰結を導き出し、農業工業及び商業の組織の法則がこの命題から如何にして、出てくるかを示すにある。だからこの命題は純粹経済学、応用経済学の総てを貫くものであるといえよう。」(『要論』手塚訳 岩波文庫(上)一七五頁)まさしくこの命題こそワルラの経済学体系を貫流する基本的命題であるわけである。この命題に対するフリードマン教授の意見を紹介するに当って、われわれなりにこの命題のうちにある論理を明確にしておく必要がある。さきにふれておいたようにワルラが二商品の価格および取引量がそれぞれの商品に

対する需要曲線、供給曲線の交叉によって定まるとした論理を一応肯定するとしても、二つの曲線は彼の場合決して同格におかれているものではないことに注意しなければならぬ。ワルラの場合供給曲線は需要曲線から導かれるものであって、いわば附随的事実である、として考えられていることである。そのことは、稀少性分折が交換の原因をなすものとして理解された彼にとっては、当然のことであつたかもしれない。したがつて需要曲線それ自体も、交換当事者の商品所有量ならびに効用曲線の基本的要因から構成されなければならないことになる。ところで需要曲線をこれらの基本的要因(商品所有量・効用曲線)へ還元するに當つてワルラの指導原理となつたものは何であつたろうか。それは自由競争の行われる市場において、二商品の間に行われる交換が、各人の欲望の最大満足を得るものでなければならぬ。いいかえると交換当事者達が入手する商品の消費によつて、満足せられる最後の欲望の強さ(限界効用)が、あらゆる商品について同一となるように取引するという事実である。このように考えてくるとワルラの右の命題は、基本的要因としての効用曲線を基礎とする需要曲線、その附随的現実的事実としての供給曲線

という一定の認識にもとづいて理解しなければならぬことになる。ではワルラは、その需要曲線の基本的要因と考えられる稀少性を、理論的にはいかなる役割をになうものとして扱っているのであろうか。フリードマン教授の右の命題に対する批判をこの角度から紹介してみよう。教授はワルラの純粹に形而上学的な稀少性の役割を彼の効用測定に関する議論によつて十分看取できるという。(Ibid., p. 902)ところでワルラは効用測定について以下のような説明をもつてした。「この分折は効用分折をさす……浜崎」不完全でありながら、一見これ以上にこの分折を一層深く進めることは不可能のように見える。なぜなら絶対的強度利用 (utilité d'intensité, utilité intensive) は外延利用 (utilité d'extension, utilité extensive) および所有量と異り、時間にも空間にも直接のかつ計量しうる関係を有しないため、測定し得られないという事実があるからである。けれどもこの困難は、超え得ないものではない。今私は、右のような関係が存在すると仮定し、外延利用、強度利用、及び所有量がそれぞれ価格に及ぼす影響を正確に数学的に説明しようと思う。「(一)要論」手塚訳 岩波文庫(七二四五頁) このワルラの効用測定の態度を、今日の

理論經濟學者の立場からすれば、どのような形式を附与するか。フリードマン教授はいう。「現今の經濟學者はかような仮設が(多分に他の仮設と結び合つた)効用を可能ならしめるある種の目立つた意味合いをもっているという説明によつてこのことを効用測定をさす……浜崎³理解すべきであるとしている。——その仮定の表明として考えられるものから推測される數的価値をあてがうことは、時間、空間に対して直接的なあるいは計測的な関係をもたないけれども——」(Ibid., p. 902)「もとよりワルラはこの方法を採用していない。ワルラはただ単に図式化され平均化される數的価値をもつなにものが稀少性と呼ばれるとしてきわめて簡単に論議を展開し、その課題についてよりつつこんだ議論をしていないのである。しかも數的価値をもつ稀少性は厚生目的にとつて関連のある觀念において“satisfaction”と同一視されることのできるとしている。ところがある点では、前に引用した効用の測定に関するワルラの敘述には皮肉なものがある。それは稀少性の自然的作用による非測定性の容易な採用である。すなわち彼は限界効用の他の開拓者と同様に、効用函数に関する二次的仮説を形成したことであつた。いわば諸財貨の集

M・フリードマン「L・ワルラと彼の經濟学体系」(浜崎)

計の総効用は函数の総計として記述されるということを仮定しているのである。そのことは交換における価値の原因としてみなされる稀少性に関する主要な弁明である効用函数の形態に充分印象づけられるのである。」(Ibid. p. 903)さてフリードマン教授はワルラ体系のいう効用測定に右のような問題点をみいだした。ところでワルラの場合、稀少性は一財自体の量に依存してのみ「絶対的」である。ところが交換における価値は、相対的であつた。(絶対的なものの二つの比率)さうして同様な基準にしたがって、特定財に関する効用曲線は、唯一可変な財貨の函数のために數種の財に依存するとみなされなければならない需要函数よりも基本的なものであつた。ともかくもし消費者選好が一つの可變的函数の総計によつて、厳密に表現されるのであるならば、効用に関する便益な計量尺度は手近であるわけである。すなわち人間は、一財のなんらかの特定単位によつて附加された効用を採ることのみを必要とするのである。その関連において、あらゆる他財の効用は、表現されることができるのである。《フィッシャーおよびフリッシュの両者が実験した方法である》(Ibid. p. 903)ところで何故この方法が採用されてきていないのか。教

授にしたがえば次のようである。いわば可変的函数の総計に存する効用函数が、消費者行為に関する意味内容を含んでいるためである。およそ厳密には、消費者所得が高ければ高いほど、消費者はあらゆる財貨を個々に消費するであろうという意味を含んでいる。まさに低級財は存在しないということの意味するのである。ワルラはいうまでもなく、かような意味内容を探究してはいない。けれども彼は一財に関する需要曲線が、つねに諸財貨の所与の所有量のために消極的に傾斜するということ、いわば対応的な意味を記述しているのである。

(Ibid., p. 903)

以上ワルラの稀少性に関して概念的な性格を検討してきたフリードマン教授は、ワルラの効用分析が、もつ特異な内在的意味を次のように評価する。「それは経済思想の研究者にとつてきわめて興味深いものであって、しかも今日効用理論が近代経済学的分析において、役割を演じるという限りにおいて、ワルラにおける形態よりも一層不自然な(経験的に空虚とはいへ)姿をとつてその役割を演じているとみななければならぬ。(Ibid., p. 903)とのべ、ワルラの経済学体系上の効用分析の位置に対する反省的暗示をなすのである。

二 一般均衡の理論

さて以上のように、ワルラにおける効用分析の意味を尋ねてきたフリードマン教授は、ついで効用分析が一般均衡理論の形成に当って、いかなる内的関係にあるかをさぐる。ところで前述したように、クルノーは商品の需要量が、その価格の函数としてとらえられるという関係を理論の前提とした。フリードマン教授は、クルノーの「富の理論の数学的原理に関する研究」(Recherches sur les principes mathématiques de la théorie des richesses, 1838)の第十一章「社会所得」の一節で展開された次の所論を引用する。「吾々は、以上各個の商品に対する需要の法則が、その商品の生産状態と結合して、如何に価格を決定し、又その生産者の所得を支配するかを研究して来た。吾々は他の商品の価格及び他の生産者の所得は一定にして不変なるものと考へたのである。併し事実上は経済体系全体であつて、その総ての部分は互に相関聯し又互に反作用するものである。商品Aの生産者の所得に於ける増加は、商品B・C等に対する需要に影響し、従つてまたそれ等の生産者の所得に影響すべく、これは又、その反動として、商品Aに対する需要の変動を惹起

するのである。故に経済体系の一部分に関する問題を完全厳密に解決する為には、その全体系を考慮することを避け得ないように思われる。けれども斯くの如きは、たとえ一切の常數値を定め得たりとしても、尙数学解折及び吾々の實際上の計算方法の力を超えるものである。」(中山伊知郎訳・岩波文庫一八一頁)クルノーの理論的意図を彼自ら語らしめた言説を、煩瑣もいとわず紹介したのは、ワルラの経済学体系とりわけ一般均衡理論の知的性格を識るためには、クルノーのそれと対比されるのが最上の途であると考えられるからである。ところでフリードマン氏は右の引用箇所からしりうるクルノーの経済組織の内的關係に関するアクセントが、ワルラにいたって詳細にしかも的確に表現しうる数学体系をもつてなされたところにワルラの決定的な業績があるとしなければならぬという。(Ibid., p. 904)けれどもだからといって、ワルラはクルノーのいう全体の組織の考察が、数学的分析の知力にすぐれているとするその考えが、謬っておると指摘したのではない。(Ibid., p. 904)教授はむしろ次のように考えるべきであるという。すなわちクルノーの概説した作業と、ワルラがなしたげた労作との両者の間には、根本

M・フリードマン「L・ワルラと彼の経済学体系」(浜崎)

の相違が存するとみるべきである。そうしてこの相違を理解することが、ワルラの経済思想上における積極的な貢獻、ないしはその貢獻の限界を問題とすにあたってきわめて大切である。極言すればその相違を認識しえない失敗が、経済学上における方法的混乱を起す根本的なことがらといわねばならない。(Ibid., p. 904)では両者の方法的相違点をどこにみいださねばならないのか。論者の見解は次のようである。

クルノーが関心をもっていた“rigorous solution”¹⁾は原則として解決ではなくて、特定問題に対する数的解決法であった。そのことは彼が常数に應ずる数的価値の指摘に直面する場合の言及、および「計算の実践的方法」practical methodology of calculation に対する論及等から明白である。クルノーの目的は、特定生産に関する特定課税の影響のような、特定の経済問題に対して適切な統計資料を提供する、いわば特定の解答をもたらす分析であった。すなわち彼は観察によつて直面し、そうして確認され、あるいは否定されることのできる事柄を解答するのである。たしかにクルノーのいうような完全でしかも厳密な解決は、「数学的分析の

知力および計算の実践的方法の知力」等のよくするところではなく、今日計算方法における高度な進展にもかかわらず、やはりそのようにいいえるというところは疑う余地のないことである。したがってクールノーが自己の問題認識に当って、完全に厳密な解決は、もはやとやかく問題とするに及ばないことであるとするのは全く正しいことであつた。彼が「そうすることはある種の近似数を主張することであるけれども、しかし有用な分析を続けることである」。(Eng: Trans. Research, *Mathematical Principles of the Theory of Wealth*, (New York, 1897 p.p. 127-28) と述べてゐるのは、むしろ正当であつたのである。(Ibid, p. 904) のようにフリードマン教授は、クールノーのいわゆる“rigorous solution”を評価し、その理論的対象がいかなるものであつたかを明らかにする。

ではワルラの方法論的性格は、クールノーのそれに対比してどのようなものであろうか。教授は次のように把える。ワルラのそれはとりあげていうほど重要ではない。けれどもクールノーのそれとはまさに異つた問題を解決したのであつた。まずいえることは、ワルラはクールノーの経験的内容の問題を空虚にしたことである。彼の問題は、形式の問題であ

つて内容の問題ではない。いわば経済体系の思想的図式を顯示することに課題があり、具体的諸問題を分析するためにエンヂンを構成するというところに課題があつたのではない。(Ibid, p. 904 傍点は浜崎)このようにワルラ体系の本源的性

格を把握するフリードマン教授は、この見解を検証づける意味で、ワルラ自身の論行を脚註で紹介する。ついで英訳者ジャフエ氏が訳書の巻末に附した『訳者ノート』(四九七頁—五五八頁)から一節を引用し、ジャフエ氏のワルラ体系に対する見解をたただすのである。ところでジャフエ氏は『訳者ノート』で次のようにいう。「私は『マーシャル的需要曲線』(“Marshallian Demand Curve,” Jour. Pol.) という論稿でマーシャルとワルラとの考え方のあまりにも鋭い相違をしめすものとして、『要論』の三〇七頁から三〇八頁にわたるワルラの論述を引用した。たしかにワルラのユニークな功績は、経済体系を抽象化し、普遍化したことであり、そのために数学的美しさをもつてなした業績である。けれどもマーシャルの課題は具体的な真理の発見のために、エンヂンを探究することであつた。ワルラとマーシャルの厳密なしかも重要な区別は、前者がつねに純粋理論と応用理論とを混同しないように注意

を喚起したのに対して、後者は二つの理論を融合することに誇りをもつていたことである。」(Eng. Trans. by W. Jaffe, "Translator's Note," p. 542) このノートに対し、フリードマン教授は、ワルラとマーシャルの対比は、右の論述がしめす限りでは正しいとしなければならない。ところがジャフェ氏が真理を把握するには、ワルラ的方法論によるものとして次の如くノートしている箇所すなわち「何人も最初純粹理論を構成するのである。―何らの経験的内容を導き入れることをせず、純粹に形式的考察のために―それから現実世界に志向し、『空箱』に詰込む。そうして常数に対して数的価値を指摘する。この段階では『第二の秩序』の影響を無視する。……このことが根本的に誤った見解に考えられているのである。」とする所にはなんとしても組しがたいという。(Ibid. p. 905) ここでジャフェ氏の見解に対するフリードマン教授の態度を紹介しないことはある意味では片手落ちにもなる。簡単にその所論をうかがってみよう。教授はいう。「ジャフェおよびワルラが『純粹理論』と呼んでいるものの重要性を否定することなく、彼等が重要なことは、『純粹理論』の総体である、という点を否定するのである。ここでは論述の都合上大

M・フリードマン「L・ワルラと彼の経済学体系」(浜崎)

切なことは、『第二の秩序』の影響が無視されねばならないであろう、あるいは適用において無視されることができるという点である。その点に関してワルラの『要論』における挿句の説明、すなわち具体的真理の発見のためのエンヂンを構成することに関係があるとして主張するには、その結果について薄弱な根拠のようである。しかし、私は本文で論述するようにきわめてオリジナルな意見を提起することどまっている。」(Ibid. p. 905 傍点浜崎) ジャフェ氏が『ノート』で展開した立場は、まさにワルラ的方法論を基盤とするものであった。ワルラと同様第二次的秩序の現実接近がすくなくとも抽象化のモデルの形で形成されるかぎり具体的な真理の発見、究明にはほど遠いものといわなければならない。ここにおのづからフリードマン教授によってなされる批判の所在があるわけである。

さてクールノーに対比して考えられるワルラの業績が、単に美しさ雄大さをもつ知識体系の構造として何人にも印象づけられるというわけのものではない。知識体系をより普遍的にしかも優美なものに形成すること、また経験的に限定化されている仮設を取除くことにあつたとも考えられる。その最

もよい例をフリードマン教授は、ワルラが生産理論において生産の不变係数 *constant coefficients* を仮定したことにみいだす。(すなわち分折を普遍化する道筋を暗示するものとして) そうしてバレットオにいたって生産の不变係数と同様可変係数をも纏羅すべきワルラの解決法が一般化されたし、今日投入産出分折との関係において、生産の不变係数が再導入されているのは、ワルラの純粹理論のより一層の進化ではなくて、むしろクルノーの問題を解決するに当ってワルラの構造を使用する一つの試みであるわけでもあるという。(Ibid., p. 906) このようにワルラ体系の反省の帰趨が(一)知識体系を普遍的なものに(二)現実接近のために、限定化された仮設を除去することにおいてあると考えられるならば、まずもってそのためには、ワルラの純粹形式の知識体系を現実問題との関係でただしてみなければならぬ。

純粹形式に関するアクセントは、経済学において二つの相異なる面で演ずる重要な役割をもっている。(一)数学のそれである。(一般的にいうと純粹論理の役割である)この役割についてフリードマン教授は次のようにいう。「何人にも認識されもし、承認されもしているが、そのことは反面この種の経済

学において誤謬がいかに多く、またその誤謬がいかに重要なものであるかを強調されるにも値する。そうしてそうした誤謬をみいだすのにいかに困難が伴うものであるかということにも値する。そういった観点からすれば、ワルラの復本位制に関する論議「第六篇・第二十一章」(リカルドオ氏ミル氏の地代および賃銀に関する理論についての論議)「第七篇・第三十九章・第四十章」等は、純粹形式に関する彼のアクセントがいかに彼自身の一般均衡理論にとって外面的なものであるかのように例であるといえよう。」(Ibid. p. 906)と云うので、いま一つの面は(二)言語を用意する場合における役割である。「分折上の整理箱」の仕切りのラベルのように、機構化している素材に使用すべき分類的図式を準備する場合においてである。」(Ibid., 906)この面におけるワルラの純粹形式の強調は、彼の貢献というべきであるとも附記する。そうして続いて論者は「およそワルラの一般均衡体系は、経済組織の概観 *birds-eye view of economic system* を与えるものであるが、しかしそれが美的に整然とされた抽象像として関心をもちのみでなく、相関的で有意義なしかも相対的に徹底したカテゴリーを与えるものとしてプラグマチックなアピールをもつてい

る。」ともいふ。

さて純粹形式に関するアクセントがもつ役割を教授にしたがって二面においてとらえた。この純粹形式に関する分類の図式が、独創的才能、非凡な技術等によって発展したであろうことは教授の言をまつまでもなく何人も周知のことである。しかしながらわれわれの問題視角は、そのような純粹形式のアクセントがもつ意味内容に、いいかえればその意味深い方法のうちには、現実アプローチという観点からして問題は存しないかという点である。この点についてはこの論稿の著者は以下のような暗示をしめす。「純粹形式がとっているその意味深い方法のうちにアクセントを考えている。といっても純粹形式が独立の科学としての経済学に関して重要性を欠如するか、あるいは経験的要件がその抽象形式の構造ないし形式の使用において、役割を演じないということの意味するのではなく、全く反対のことを考えているわけである。」(Ibid., p. 906) このようにフリードマン教授自身決して、純粹形式に関心をもちたいわけではない。ただそれに対する強調をどこにみいだすかという点においてすくなくともワルラの場合と異った見解のようである。まさにそれは純粹形式が

とっている方法の意味内容にアクセントの所在を看取しようとするものである。それにしても教授は、純粹形式に関する強調が経済学的分析において重要な役割を演じるということをなんら否定するものではない。事実その役割が演じている理由を認めるのである。(Ibid., p. 907) しかしながらもしその形式が経験的判断および理解によって明らかにされないならば、有害であるとさえ述べている。(Ibid., p. 907) (その極端な例としてワルラの貯蓄に関する効用分析を指摘しているが、われわれは紹介を割愛する) 教授のこの所論にわれわれは、いささか理論経済学の進路に対する警戒のともしびをみいだした感さえるのである。

三　む　す　び

ワルラの一般均衡理論のもつ形式的意義を効用分析との関連で検討をなし、純粹形式の経済学上における問題点を指摘したフリードマン教授は、次のように論じて結びとする。ワルラはいかなる学者よりも、われわれの思想を組成するための骨組を提供する。その骨組というのは、経済体系を考察する方法であり、しかも論理上の誤謬の回避を容易にする方法

である。したがってその方法は、実り多いそうして有意義な経済理論としては、それ自体充分ではない。そういったからとて、またそのことを強調したからといって、ワルラのその方法がならん貢献するものがなかったということの意味するわけではない。分業は経済理論においてもいえることである。経済学はわれわれの思想を組織化するためにも骨組を要請するのみでなく、組織されるべき思想を必要とするのである。いわば正しい種類の言葉を必要とするのである。われわれがしばしば言及する必要性を感じるクルノーが、問題となしたような種類の経済現象に関する独自の仮設は、きわめて効果的で有意義な経済理論の本質的要素であるといわねばならない。ところがワルラは、こうした領域にほとんどならん貢献すべきものはないのである。このためわれわれは、他の経済学者とりわけマーシャルの功績に目をむけなければならぬのである。(Ibid., p. 908) この論述からすればワルラの経済学の方法は、たとえシヌムベーターほどではないにしても今日なお理論経済学の立場からすれば経済体系を考察するに当って強力な骨組を提供してくれるものとして評価しなければならぬ。しかしながらフリードマン教授が指摘する

ように、クルノーの経済理論の立て方およびその理論の対象とワルラのそれらとの間には本質的に異ったものがある。思想系列からみて、クルノーからマーシャルへと理解すべきであるとするならば、そうして今日経済学の急務が厚生の問題にあるとするならば、理論の対象をどのようにその厚生の問題視角から分析するか、ないしは経験的素材をどのように処理するか、ということがまさに問題ではなからうか。もとより経済理論の道具化された知識の系譜をたどってそのことは立証される必要もあろうが、それは問わずとしても、この論稿の著者フリードマン教授は、方法史のあるいは思想的領域から深い示唆を与えることに意図があつたようである。

最後に教授はいう。ワルラの理論的作業は、おのずから純粹形式に関する関心の集中から、必然的に外観的非生産的様相を呈す結果となつた。そうしてその純粹形式は彼の場合充発展開した経済理論の本質的部分でないのみでなく、それ自体経済理論でもないものにするように結び合つてきたのである。たしかにこの経済理論の概念は、内容の点よりも形式の点にはるかに装置される経済学を創造する援けとなつた。けれども今日結論的にいって要請される経済的作業の性格は、

ワルラのなものであるよりも、マーシャル的な性格の仕事が急務とされる。(Ibid, p. 909) われわれは紹介を終えるに当たって次のことを述べておかなければならない。われわれがこの論稿を紹介する問題意識は、方法的にはラディカルな問題提起にあった。フリードマン教授はそういった意味からも、ワルラ体系の今日的評価を限界づけてくれている。と同時に、経済学の理論体系を問題とする場合の研究者の態度、問題意識を示唆してくれた。ワルラ体系が、内容の点よりも形式の装置にうきみをやし、現実分析の学としての性格から遊離した経済学を創造する援けとなったとするならば、たとえフリードマン教授がいうように、ワルラの思想は、われわれ研究者に骨組を提するものであるとしても、ワルラ自身が陥ったように、価値規準が理論的仮設のうちに決定づけられ、それが現実の内外的価値規準としてすりかえられるおそれのあることに注意をはらわなければならない。

ワルラに対するフリードマン教授の評価は、シムムベータIほどの積極的なものではなかった。それも今日的中心テーマが、資本主義経済機構のもとにあって「厚生」に統一されていることにも起因する。アメリカ経済学の行く道が一般に

いわれる New Welfare Economics にあるとすれば、そうして Welfare Economics に対する考え方が、A. G. Hart や H. A. Mynt のようにポジティブに規定することもせよ、P. A. Samuelson のようにネガティブにあらわれるにしても、経済学の現実的対象が「厚生目的」にいか接近するかに存するとする限りでは、フリードマン教授がいうよう理論的性格がマーシャル的なものと反省されるのも理由のないことではない。